

F・シュレーゲルのフランス紀行

—— >Europa< 像の成立 ——

高 木 昌 史

旅程図

目次

序

初期ロマン派の解体

『キリスト教世界あるいはヨーロッパ』（ノヴァーリス）

ライン河を越えて

文芸雑誌 > Europa <

a 「フランス紀行」

b ロマンズ語文献学

「ヨーロッパ文学史」講義

帰国

結語

註

旅程図 [1802 ~ 1805 年]

1 ベルリン—ドレスデン—ライプツィヒ—ヴァイマル—マインツ

1802/1 1802/1~4 1802/5 1802/5下旬 1802/夏

|

パリ——メッス

(1802/7下旬—1804/4) 1802/夏

2 パリ—サン・ドニ—ブリュッセル—アーヘン—デュッセルドルフ

1804/4

|

ケルン

(1804春—1804秋)

3 ケルン—マインツ—シュトラースブルク—ジュネーヴ—リヨン

1804秋

1804/10～11 1804/11

ケルン———————パリ

1805/春 (1804/11—1805/3)

序

ドイツ・ロマン派の批評家フリードリヒ・シュレーゲルが1802年に試みたフランスへの旅は、彼の人生に新しい地平を拓いたばかりではなく、巨視的に見て、ドイツの文学史あるいは文化史の流れに大きな転換をもたらしたという意味で、きわめて重要である。すなわち、この旅を契機に、シュレーゲルは以後、新しいヨーロッパ像を求めて、稀に見る雄大な構想のもとにその批評活動を開始するのである。

その旅の文化史的意義については、ドイツのロマニスト、エルンスト・ローベルト・クルツイウスが名論文を残しているが⁽¹⁾、その論文が書かれてから今日まですでに半世紀が経過し、その間、ヨーロッパをめぐる状況は急激に変化してきた。ヨーロッパは世界の動向の中で、その統一体としての存立基盤を様々な次元で、現在、ますます問われているのである。

シュレーゲルは今からちょうど200年前に、ドイツからライン河を越えて、革命が勃発して十数年後の、急速に近代化しつつあったパリに赴き、この大都会で、文芸批評家として新たな地歩を確立しようと、1年9か月近く努力を重ねた。その成果は、彼が刊行した雑誌『オイローパ』Europa (=ヨーロッパ)⁽²⁾に一つの結実を見る。

文字通り「ヨーロッパ」と名打ったこの文芸雑誌の中で、彼は—もちろん当時の時点での—新しいヨーロッパ像を彼独自の視点から繰り広げたが、その中心テーマは、統一体としてのヨーロッパに他ならなかった。欧州はみずからのアイデンティティをどこに、どのように築くべきなのか?というテーマを、シュレーゲルは今から二世紀前に問うたのである。

彼が構想したヨーロッパ像は、今あらためて読んでも、200年の時の隔たりを超えて、なお斬新で魅力的な発想に満ちている。『ヨーロッパ』誌巻頭を飾る彼のエッセイ「フランス紀行」はそのすべての始まりを告げる宣言文と言ってよい。本稿では、前述クルツイウスも指摘するように⁽⁹⁾、きわめて重要なこのエッセイを中心に、パリ時代の彼の脳裏に萌した多元的ヨーロッパ像を探ってみることにする。

事態が複雑になればなるほど、原点に位置するものが問題の所在を思わぬかたちで示してくれることがある。統一体としてのヨーロッパという問題を、本場西欧でおそらく初めて本格的に提起した人物であるシュレーゲルの言葉にしばし耳を傾けてみたい。

初期ロマン派の解体

フリードリヒ・シュレーゲルがフランスに旅立ったのは、三十歳の折り、彼の人生のほぼ半ばである（彼は五十七歳で没している）。人生の半ばはしばしば大きな転換期をもたらす。例えば、中世イタリアの詩人ダンテは、その畢生の大作『神曲』の中で、人生の半ばに、彼が暗い森に踏み迷ったことを歌っている（「地獄篇」第一歌）。シュレーゲルの場合には、華々しく活躍した人生前半の批評活動に終止符を打って、この半ばで、新天地を

求めて、ドイツを後に、西欧で当時最も発展しつつあったパリを目指したのだった。

では何故、すでに地盤を築きつつあった祖国を彼は去らなければならなかったのか？

ドイツ・ロマン派の最盛期は、機関紙『アテネウム』Athenäum⁽⁴⁾が刊行された1798年から1800年にかけて、イエーナに花咲いた。新進気鋭の批評家フリードリヒ・シュレーゲルと彼の兄アウグスト・ヴィルヘルムが発刊したものである。この町には最初、1796年、アウグストがシラーの招きで、後者が当時発刊していた文芸雑誌『ホーレン』Die Horen⁽⁵⁾に協力するために、結婚したばかりのカロリーネと共に移住した。その頃『ギリシア人とローマ人。古典古代に関する歴史的・批判的研究』Die Griechen und Römer. Historische und kritische Versuche über das klassische Altertum, 『ゲオルク・フォルスター』Georg Forster, 『レッシング論』Über Lessing等(いずれも1797年)を発表し⁽⁶⁾、雑誌『リュツェウム』Lyceum⁽⁷⁾の協力者としてベルリンに滞在していたフリードリヒは、当地でドロテア・ファイト、作家ルートヴィヒ・ティーク、哲学者シュライエルマッハーなどと知己を得ていたが、1799年9月には、兄のいるイエーナに移った。こうしてこの秋には、シュレーゲル兄弟、カロリーネ、ドロテア(その間、ファイトと離婚していた)、ティーク、ノヴァーリス(1792年以來のフリードリヒと同年の友人である)、哲学者シェリングがイエーナで一堂に会し、いわゆる初期ロマン主義の絶頂期を迎えた。

しかしながら、1800年にイエーナ大学で教授資格を獲得し、冬学期に「超越論哲学」を講義して以後、フリードリヒをめぐる状況は大きく変化した。イエーナ大学での講義は当時華々しく活躍していたシェリングのそれと重

複し^⑧、同年8月には『アテネウム』誌も廃刊となる。さらに追い討ちをかけるように、1801年3月には親友ノヴァーリスが死去する。同年4月、フリードリヒはベルリンへ移住、折しも、カロリーネとの結婚生活に破綻をきたした兄アウグストもベルリンへ移り、当地で『文学・芸術講義』^⑨を開始する。そしてそれが機縁で、アウグストは当時ドイツを旅行していたスタール夫人（後述）と出会うことになる。イエーナに花咲いた初期ロマン派はこうして解体する。

フリードリヒ・シュレーゲルがパリに旅立った背景には、以上のような理由があった。それにしても、祖国ドイツを離れて、彼が一心発起して隣国フランスに向かうには、さらに決定的な動機があった。それには、ノヴァーリスの存在が、というより遺志が大きく影響していた。

『キリスト教世界あるいはヨーロッパ』（ノヴァーリス）

フリードリヒとノヴァーリス（本名フリードリヒ・フォン・ハルデンベルク）は、1792年、いずれも二十歳の学生として、ライプツィヒで出会っている。以来、二人は固い友情で結ばれ、1796年夏、イエーナで再会、旧交を温め、2年後の1798年夏にもドレスデンで一緒に時を過ごしたが、さらに翌1799年9月、前述のように、イエーナで他のロマン派の詩人たちも交えて交遊した。しかし、それから一年半後の1801年3月25日、ハルデンベルクは惜しくも急逝してしまう。この間、彼はノヴァーリスの筆名で^{ペンネーム}『アテネウム』誌に断片集『花粉』Blütenstaub（1798年）を発表、また1799年10月から11月にかけては、エッセイ『キリスト教世界あるいはヨーロッパ』Die Christenheit oder Europa^⑩を執筆する。フリードリヒ・

シュレーゲルのパリ行きには、実は、このエッセイが強い推進役を果たしていた。

しかし不思議なことに、このエッセイが完全なかたちで日の目を見たのは、1826年、つまり著者没後四半世紀も経てからのことであった。フリードリヒ・シュレーゲルとテーク編集による最初の『ノヴァーリス著作集』(1802年)にも、また1805年と1815年に刊行された同著作集でも、『キリスト教世界あるいはヨーロッパ』の全容は示されず、数か所の抜粋が掲載されるにとどまったのである。この点に鑑みて、『ノヴァーリス作品集』の編者G・シュルツは言う。(フリードリヒ・)シュレーゲルは全体の公表が、著者(ノヴァーリス)の性格に関して、一般の混乱を引き起こすのを危惧したのではないかと⁽¹¹⁾。ノヴァーリスのこのエッセイは、魅力的であると同時に問題性を孕む発言に満ちていたのである。例えば、次の一節。

「ヨーロッパが一つのキリスト教の国であった時代、単一のキリスト教徒がこの人間的に形作られた大陸に住んでいた時代は美しく輝かしい時代であった。一つの大きな共通の関心がこの広大な宗教的王国の最も辺鄙な地方をさえ結びつけていた。世俗的な大所有地も持たないままに、一人の指導者が大きな政治的諸勢力を導き統一していた」(施線部分は原文イタリック体)⁽¹²⁾。

この文章を歴史的に読むとこうなるだろうか。メロヴィング朝のクロートヴィヒ王がアレマン族を破り、キリスト教に改宗した496年、(小)ピピンがフランク族の王となりカロリング朝が始まった751年、カール大帝がローマの帝冠を受けた800年以後、騎士道時代を経て、1517年、ルターの宗教改革まで、ほぼ一千年に及ぶ西欧の中世が、ノヴァーリスの描く「輝かしい時代」=中世のイメージである、と。

このエッセイとは別に、ノヴァーリスはある断片にこうメモする。「十字軍における騎士道の成立。十字軍の中でヨーロッパは目に見えるものとなる。十字軍についての新たな見解」⁽¹³⁾。

ヨーロッパが一つの統一体として歴史上にその姿を現した時代＝中世を浮き彫りにしたという意味で、ノヴァーリスの以上の発言は重要である。このテーゼは、フランス革命とその後の動乱の中で、また「自由、平等、博愛」のもとに近代化の胎動が着実に始まっていた1800年前後に提起されたのである。ヨーロッパに平和をもたらし、安定した新秩序を構築すべき何らかの理念あるいはヴィジョンを、当時の心ある知識人は多かれ少なかれ求めていた⁽¹⁴⁾。ノヴァーリスの呈示したヨーロッパ像はこの歴史的文脈の中でももちろん評価する必要はある。しかし、それにしても、彼の構想はいささか懐古的で宗教的なものに傾きすぎてはいないか。新時代の幕開けを告げる言葉としては、時代の動向から離れすぎてはいないだろうか。一方、フリードリヒ・シュレーゲルはある断片の中で次のように宣言する。「フランス革命、フィヒテの知識学、そしてゲーテの『(ヴィルヘルム・)マイスター』、これが時代の最大の傾向である」⁽¹⁵⁾。

統一体としてのヨーロッパ、という親友ノヴァーリスの提言を受け継ぎながらも、シュレーゲルは、時代の動きにより相応しい新しいヨーロッパ像を、彼独自の認識と方法によって構築すべく、密かな決意を抱いて、住み慣れたドイツを後に、革命の本場、先進国フランスを目指して出発する。来たるべきヨーロッパのヴィジョンを求めるシュレーゲルにとって、その旅は、やがて見るように、過去の深みへの遡及を意味したと同時に、現代モデルネという時代への巡礼行ともなる。

ライン河を越えて

新しいヨーロッパ像の必要性を提言した親友ノヴァーリスの死の床に立ち会ったフリードリヒ・シュレーゲルは、1802年1月ベルリンを出発し、パリに向かう。その旅の様子は、同年7月下旬にパリ到着後、彼が当地から発信した文芸雑誌『オイローパ』Europa (=ヨーロッパ)の巻頭を飾る「フランス紀行」Reise nach Frankreich に詳しい⁽¹⁶⁾。

ところで、フランスの首都を目指したドイツ人はシュレーゲルばかりではなかった。彼以前には、1769年に、ラトヴィアのリガからナントまで船旅をしたヘルダーが、ドイツへの帰路にパリに立ち寄った⁽¹⁷⁾。またフランス革命に共感したゲオルク・フォルスター（前述のように、シュレーゲルは『ゲオルク・フォルスター』論を書いている）は、1793年、マインツからパリに赴き、翌年、当地で客死している⁽¹⁸⁾。さらにシュレーゲルに先立つことほんの5年、1797年には、ヴィルヘルム・フォン・フンボルトがパリのフォール・サンジェルマンに居を定め、3年9か月間、スタール夫人などが集った知識人のサロンを主催した⁽¹⁹⁾。そしてシュレーゲルと同時期には、劇作家ハインリヒ・フォン・クライストが1801年および1803年にパリに滞在し、詩人アヒム・フォン・アルニムも同じ1803年、パリに旅している。シュレーゲルからほぼ30年後には、ハインリヒ・ハイネが祖国ドイツを去って、パリに永住の地を見出していた。しかし、シュレーゲルのパリ滞在は、新しいヨーロッパ像へのその寄与において、他の文人と比べても、群を抜いていた⁽²⁰⁾。

フランスに旅立つ前の彼の行動範囲は、旧東独を中心とする中部ドイツに限られていた。生まれはニーダーザクセンのハノーファー、学生時代は

同ゲッティンゲンとザクセンのライプツィヒ、その後も同ドレスデン、テューリンゲンのイェーナ、そしてベルリンが、彼の過ごした町である。パリへの旅はしたがって、彼にとってはヨーロッパの西の世界に初めて踏み出す大きな一歩であった。何よりドイツとフランス、ゲルマン文化とラテン文化、東と西、そしてある意味では、過去と未来が、この旅によって、シュレーゲルの視界の中で、一つに結ばれたのである。では、その記録「フランス紀行」を読んでみることにしたい。

文芸雑誌 > Europa <

フランスへの途上、シュレーゲルはライプツィヒでフランクフルトの出版者フリードリヒ・ヴィルマンズと文芸雑誌 > Europa < (『ヨーロッパ』) 刊行に関する契約を交わしていた⁽²¹⁾。1802年7月下旬、パリに到着したシュレーゲルは、翌1803年2月にはこの雑誌の第一冊目を発刊する。以後1805年まで、計二巻四冊が刊行される。同誌には、兄アウグスト他、数名の寄稿者がいたが、フリードリヒ自身が執筆したエッセイは次のとおりである。第一巻／第一冊1「フランス紀行」、2「文学」、4「詩」、6「パリの絵画報告」／同第二冊1「ラファエロ論」、3「近代詩の歴史への寄与とプロヴァンス語手稿の報告」、9「パリ絵画通信」／第二巻第一冊2「イタリア絵画補遺」、3「ラシーヌの韻律訳の試み」／同第二冊「古い絵画の第二補遺」、6「古い絵画の第三補遺」の計十一篇である⁽²²⁾。そのうちほぼ半分が絵画論であるのは意外でもあり興味深くもあるが、それについては別の機会に譲り、本稿では一・一・一の「フランス紀行」および一・二・三「近代詩の歴史への寄与とプロヴァンス語手稿の報告」を中心に、『ヨーロッパ』誌の内容を紹介す

る。

a 「フランス紀行」⁽²³⁾

このエッセイは「回想」「観察」「考察」の三部構成である。ゲーテの『イタリア紀行』のように、日記風の体裁はとっていない。シュレーゲルのこの紀行文は最初からある意図をもって構築された作品である。

第一部「回想」は、出発地点に近いマイセンの大聖堂からのエルベ河の眺めに始まる。続いて、ドレスデンの美術作品の鑑賞、ヴァイマルでの自作悲劇『アラルコス』上演の様子、アイゼナハのヴァルトブルク城（中世に歌合戦が行われた）を取り囲む美しい山と谷と丘の風景などが描かれたあと、場面はドイツとフランスの国境となるライン河にさしかかる。シュレーゲルはそこで、散文に詩を挿入するロマン派独特の手法を用いて、九七行に及ぶ長い詩の中でカール大帝を歌う。そしてそこからドイツの過去が回想される。

^{いにしえ}古のイタリア詩人が「ドイツ的凶暴」Furor Tedesco と呼び、カール五世時代のスペイン人が「ドイツ的凶暴」los fieros Alemanes と名づけたドイツ的性格が、時の歩みの中で、漸次、忍耐と謙譲という「民族的な美德」へと変化していったこと、またドイツ人をローマ人と区別するのは「自由へのより大きな愛」であること、最も偉大な近代的英雄は皇帝フリードリヒ二世であること、等々を語ったシュレーゲルは、ライン河を目の前にしてこう感慨を述べる、「王者のようなこの河を眺めると、ドイツ人の心は憂いに包まれる」、と。ライン河にはドイツの歴史と性格が深く刻印されているのである。

以上の「回想」は、シュレーゲルの旅の記録の回想であると同時に、ドイツの歴史の回想でもある。ノヴァーリスの『キリスト教世界あるいはヨーロッパ』の中世のイメージが、ここではシュレーゲルの歴史観に基づいてより明確に再構成されている。ただしこの「回想」は、次の第二部「観察」と対比されることによって、新たなヨーロッパ像を紡ぎ出していくことになる。

「観察」はライン河を渡った直後のシュレーゲルの第一印象を書き留めている。「ロレーヌ地方に入り、妙に目立つ地方訛りのフランス語の耳慣れぬ響きを聞くと、世界は異なる性格を帯びてくる」と。「フランス紀行」第二章は、初めて見るフランスの観察記である。シュレーゲルは彼の旅の哲学をこう記す。「最初の印象においてのみ、われわれはまさしく、まったく偏見も捉われの気持ちも抱かない。その瞬間には、人間が芸術作品の人物像のように、実際、完全に純粋にわれわれの目に映じる」。しかし、と彼は続ける、「自由と直感の最初の瞬間が過ぎてしまうと、われわれは行動や意図に捉われて、特定の目的に従って相手を選び、目的がすべてを大きく包み込んでしまう。……ある国民の特性を記述するためには、それゆえ、人は異邦人でなければならない。厳密な意味では、第一印象の瞬間にだけ、人はそうなり得るのである」。

旅の意味と醍醐味は、シュレーゲルの言うように、「第一印象」という貴重な瞬間に凝縮しているのかも知れない。国民の特性は、この第一印象ゆえに、同質化した同国人の眼よりは異質な旅人（＝「異邦人」）の眼にむしろ斬新に映るのである。

以上を確認したシュレーゲルは、ここから異国フランスの国民的性格を分析し始める。観劇から得た彼の印象によれば、フランス人には「痙攣性」

の情熱がある。それが彼らの性格に深く根を下ろしていることは、聖バーソロミューの虐殺（1572年）やフランス革命（1789年勃発）ばかりではなく、古い時代の歴史が教えている。この性格は普段の生活では潜伏している。しかし、何かの機会にそれは噴出してくるのである。

他方、フランス人にはこの痙攣性の激しさとは別に、「快活な気分」が、身分や年齢や性別を問わず、一般に認められる。それを端的に示しているのが、下層の身分の男性に見られる「独特の礼儀正しさ」である。普通、フランス人は少しばかりの白パンと葡萄酒と水、そして日に数百回繰り返される「旦那様」があれば満足なのだ。彼らは「世界で最も幸せな住民」である。しかし、その反面、彼らの生活はあまりに規則通りに進行するために、各個人は驚くほど似通っている。ドイツ的な個性を見慣れた眼には、フランス人の差異（＝個性）はほとんど分からない。こうした「単調さ」こそ、フランス的快適さの理由なのである。

シュレーゲルはここで方向転換し、フランスの都市生活の印象を語る。マインツからパリに向かう中間にあるメッスでは、通りに商店が建ち並び、商品の売買と消費に生活は沸き返っている。「商売と交易、魚屋と香水店、呼屋と総菜屋、靴磨きと華麗な服装店にあふれたフランスの街路は、いわばオランダ絵画の動く生きた画廊である」。ブリューゲルなどフランドルの風俗画を想起させるこの印象記は、ゲーテがブレンナー峠を越えて、イタリアに入ったときに感じた南国の町の活気のそれに似ている⁽²⁴⁾。シュレーゲルはパリの旧市街の第一印象をこう語る、「優雅と快適」が「現代」を支配している、と。ドイツから来た彼はしかしそうした都市生活に間もなく嫌気がさす。何かもの悲しくなり、音楽と歌が恋しくなる。しかし無駄である。何故なら、フランスの都会では、すべてが「想像」Phantasieのた

めではなく、「感覚」Sinnlichkeit のために出来ているからだ。あらゆることが感覚的で、文字通り「見せもの」Schauspiel（「演劇」「光景」となっている。

これは1802年のパリ印象記である。シュレーゲルの眼前には「現代」が突如開かれたかの感があったにちがいない。R・ミンダーによると⁽²⁵⁾、1800年のパリの人口は五十万人（ちなみに、当時のベルリンは十七万人）、1817年には七十万人、そして1840年には百万人に達した。S・メルシエの『パリ情景』Tableaux de Paris（1781-88年）やレチフ・ド・ラ・ブルトヌの『パリの夜』Nuits de Paris（1788-94年）（当時、ヴァイマルの宮廷でも盛んに読まれていた）など、その頃のパリを描く本場の作品はあるが⁽²⁶⁾、シュレーゲルはそれらの少し後に、前述のような印象記を祖国に報告したのである。彼は都会の華やかさと同時に影の部分もすでに感受している（「想像」の欠如）。それは、ちなみに、ボードレールに先立つこと半世紀である。シュレーゲルは結論する、フランス人の性格的特性は「燃えるような情熱」と「機知豊かな陽気さ」である。この特性の一部は「生来」のものであり、一部は「風土」に基づいている、と。風土を重視するのは、フランスではモンテスキュー（『法の精神』）⁽²⁷⁾、ドイツではヘルダー（『人類史の哲学のための理念』）⁽²⁸⁾ 以来の伝統であるが、シュレーゲルはフランスでそれを実感したのだった。

「フランス紀行」第三部は、第一部ドイツの「回想」と第二部フランスの「観察」を総合して、新しいヨーロッパ像を拓く「考察」である。シュレーゲルは言う、われわれは「真の中世」に生きている、と。彼のいわゆる「中世」Mittelalterとは、「中間」Mittelの「時代」Alterのことである。彼によれば、現代は「いわゆる中世」と呼ばれた時代と「未だ隠された」

もう一つの時代ととの中間に位置する。他方、地理的に、「世界の首都」la capitale de l'Univers パリは、北でも南でもないヨーロッパの中心に位置する。このような中心こそ「考察」に最適の場である⁽²⁹⁾。

時間軸に添って（中世）、そして空間軸に添って（パリ）、シュレーゲルは「中心」から発信してヨーロッパ像を構築しようと決意したのである。彼は続ける、ヨーロッパの北と南は「二つのまったく異なる国々」である。この「風土的対照性」「有機的分裂」こそは、物理的に、また歴史的に見て、ヨーロッパの性格にとって「本質的」wesentlich である⁽³⁰⁾。

以上見るように、フリードリヒ・シュレーゲルの『フランス紀行』は単純な意味での紀行文ではない。三部、すなわち「回想」「観察」「考察」は、誤解を恐れずに言えば、「過去」「現在」そして「未来」であり、別の表現を用いれば、「ドイツ」「フランス」そして「ヨーロッパ」である。ドイツとフランスが新しいヨーロッパ像を構築する二つの要になるという認識は、シュレーゲルがラインを越えて初めて明確化してきたもので、この河流によって、二つの軸、ドイツとフランス、ゲルマン文化とラテン文化は分離され、結合されて、「統一体」を形成するのである。「フランス紀行」は綿密に組み立てられた高密度のテキストに他ならない。

b ロマンズ語文献学

西ヨーロッパの中心パリに拠点を定めたシュレーゲルが早速開始したのは、ロマンス語の言語および文学研究である。『ヨーロッパ』誌第一巻第二冊（1803年刊）に発表された彼の論文『近代詩の歴史への寄与とプロヴァンス語手稿の報告』Beiträge zur Geschichte der modernen Poesie und

Nachricht von provenzalischen Manuskripten は、彼の徹底した仕事ぶりをよく示している。E・R・クルツイウスの言葉を借りれば、「Romania には、フリードリヒ・シュレーゲルがかつて研究したことがなかった分野は殆ど存在しない」⁽³¹⁾のである。

論文の冒頭、シュレーゲルはまず、ドイツ人には「異国のものを愛するという生来の衝動」があると前置きし、こう続ける。「特に、南の国々の美しさは、^{あらが}抗い難い魅力でドイツ人を惹きつける。この傾向は歴史と同じくらい古いものである」⁽³²⁾。ゲーテの『イタリア紀行』を想起すれば、この言葉は容易に理解できる。重要なのは、シュレーゲルがこの南国の美への憧れを文献学的に論証したという事実である。

ラテン語に由来する近代諸語、フランス語、イタリア語、スペイン語、そしてポルトガル語、等はロマンス語と呼ばれるが、これらの言語ならびに文学を研究するロマンス語文献学 Romanistik の基礎を本格的に開拓したドイツ人は、他ならぬフリードリヒ・シュレーゲルであった。この分野での現代の巨匠クルツイウスはそれ故、『ヨーロッパ文学批評』 Kritische Essays zur europäischen Literatur 1954 (50) の一章を、とかく誤解の多かったこの批評家の再評価を訴えながら、彼に捧げたのだった（「フリードリヒ・シュレーゲルとフランス」 Friedrich Schlegel und Frankreich）⁽³³⁾。

『近代詩の歴史への寄与とプロヴァンス語手稿の報告』の内訳は、「ボツカッチョの『テーセウス物語』」、「ミケランジェロの詩」、「^{ロマンス}一般物語詩集」、「ポルトガルの文芸」および「プロヴァンスの文学」である。最初の二篇はイタリア、次がスペイン、続いてポルトガル、最後にフランスといった具合に、まさしくロマンス語圏を包括している。なかでも、「プロヴァンスの文学」の章は、本国フランスを含めても、文字通り先駆的な業績であつ

たようだ。この領域では、『トゥルバドゥールの原詩選集』*Choix de poesies originales des troubadours, 1816-21*, 六巻を編纂したF・レーヌアール(1761-1836年)が研究の出発点と言われる。シュレーゲルはそれに十三年先立って、他ならぬこのフランス人の援助を受けながら、パリ図書館で手稿の研究をしたのである⁽³⁴⁾。十一世紀から十四世紀にかけて南フランスのプロヴァンス地方の宮廷で花咲いた優美この上ないトゥルバドゥールの文学⁽³⁵⁾は、シュレーゲルが論文の冒頭で語った南国の「抗い難い魅力」の最たるもので、またロマンス語文学の華でもあるが、その重要性をいち早く見抜いたのは彼の慧眼であった。

『フランス紀行』の章で見たように、シュレーゲルが企図したのは、ドイツとフランスを基点にした、ゲルマン文化とラテン文化を総合するヨーロッパ像の再構築であったが、論文『近代詩の歴史への寄与とプロヴァンス語手稿の報告』は、後者の系列を原語に即して歴史の深みから照射する意欲的な論考なのである。

イタリア文学に関して、シュレーゲルはパリに出発する以前すでに『ジョヴァンニ・ボッカッチョの文学作品についての報告』(1801年)⁽³⁶⁾なども発表していたが、『ヨーロッパ』誌の論文(『近代詩の歴史……』)においては、より大きな文学史の流れの中に、ペトルカとは対照的なこの作家を位置付けている。スペイン文学とポルトガル文学については、前者ではロマンセロ *romancero* というジャンルがスペイン文学の「根源的に支配的要素」であること、ドイツ語がその「東洋的な彩りある情熱」を習得するのに向いていることなどを指摘し⁽³⁷⁾(ちなみに、兄アウグスト・ヴィルヘルム・シュレーゲルは『スペイン劇場』の題で、カルデロンの作品集の独語訳を発表している[1803年-09年])、後者ポルトガル文学では、カモン

イス（1525? - 80年）の『ウス・ルジーアダス』をホメーロスの叙事詩に比すべき最高傑作と讃え、この国の文学の優美さと感情の深さに読者の注意を向けている⁽³⁸⁾。

以上のロマンス語文学論は、北と南、東と西、ゲルマンとラテンといった対称軸を包括するシュレーゲルのヨーロッパ文学像の後者の系列を調査研究した成果である。この基盤の上に、彼はパリ滞在時代、類例のない「ヨーロッパ文学史」を構想し講義することになる。

「ヨーロッパ文学史」講義

パリ時代、シュレーゲルが試みた仕事の一つに私的な講義がある。滞在最後の約半年間、1803年11月から翌1804年4月まで、ケルン出身の美術収集家ボクスレー兄弟と彼らの友人J・B・ベルトラム（後にヘルミーナ・ド・シェジーも加わった）を相手に行った「ヨーロッパ文学史」Geschichte der europäischen Literatur, 1803/04である。⁽³⁹⁾ 古代ギリシアから現代までのヨーロッパ各国各地域の文学の歴史を綿密かつ巨視的にまとめたこの講義は、ドイツのみならず西欧でも、今日に至るまでおそらく類例がない記念碑的な業績である⁽⁴⁰⁾。同講義を土台にして、シュレーゲルは続くケルン時代、1804年6月から翌1805年4月まで、『古代および近代文学史』Geschichte der alten und neuen Literaturを多くの聴講者の前で講演し⁽⁴¹⁾、さらにそれを拡大して、後年、1812年2月から同年4月にかけて、ウィーンで同じ演題のもとに、王侯貴族など二〇〇名列席の「豪華絢爛」な雰囲気の中で（聴講者の一人、詩人アイヒェンドルフの評）、十六回にわたって講演を行っている（1814年刊）⁽⁴²⁾。さて、前述パリ講義の章分けは次

のようになっている。

序 ヨーロッパに関する一般的考察

ギリシア文学 [ギリシア神話／様々な時代の年代記／ギリシア語に関する一般的考察]

叙事詩の時代／抒情詩と劇の時代 [ギリシア悲劇の特性／ギリシア喜劇の特性]

ギリシア哲学

ギリシ哲学の諸時代／散文の起源について／哲学の内容と素材について／プラトンの特性

ローマ文学

キリスト教時代の文学

近世ラテン語の文学／古フランス語の文学 [イタリアとスペインの音節の長短] / イタリアの文学／スペイン・ポルトガルの文学 [スペイン人の劇文学] / 古英語の文学／北欧の文学／古いドイツの文学

「序」の中でシュレーゲルはこう語る。「ヨーロッパ文学は関連する一つの全体を形成する。そこではすべての分野が内密に織り合わされ、一つのは他のものに基づき、後者によって説明され補完される」⁽⁴³⁾。ヨーロッパ Europa を互いに緊密に結ばれた「一つの全体」ein Ganzes と捉えるシュレーゲルの観点および方法は、各論の隅々にまで徹底している。その細部を再検討することは、ここで詳しくは措くが、今日的にもきわめて興味深く示唆するところも大きい。

さて、初めにシュレーゲルは「文学」Literatur を「言語の中で作用するあらゆる学問および芸術」と定義する。したがって「文学」には、「詩」「雄

弁」「歴史」「哲学」そして「神話」等、すべてが数えられる⁽⁴⁴⁾。この定義は、学問が細分化され過ぎた今日では、むしろ新鮮かつ刺激的である。諸学問の再構築が叫ばれ、学際化が進行しつつある最近では、シュレーゲルの方法はある意味で先端を行っていると言ってよい。加えて、彼はすでにヨーロッパを統一体（「一つの全体」）として理解しているがゆえに、彼の文学史は今こそ再評価されるべきかも知れない。

シュレーゲルはもう一つ重要な提言をしている。彼によれば、ヨーロッパは「造形可能性」Bildsamkeit、「変化性」Veränderlichkeit、「改革熱」Neuerungssucht、そして「完成能力」Perfektibilitätが本来的傾向となっている、と。（これはアジア的（「自然の」豊かさ）や「自己完結性」と対比される）⁽⁴⁵⁾。

十八世紀の思想家 J・J・ルソーに由来する「完成能力」perfectibilité の概念⁽⁴⁶⁾を応用して、シュレーゲルはヨーロッパ的特性を柔軟性や改革性に認めるのである。想起されるのは、ロマン主義の機関紙『アテネウム』の有名な断片（一一六番）である。「ロマン主義文学は前進する普遍的文学である。その使命は、分割されてしまった文学のあらゆるジャンルをふたたび統合して、詩を哲学や修辞学と結びつける」⁽⁴⁷⁾。

「前進する」progressiv「普遍的文学」Universalpoesie という発想が、「ヨーロッパ文学史」序文の「完成能力」の概念と関連していることは言うまでもない。シュレーゲルはロマン主義文学の宣言を、文献学的により精密に根拠づけ完成させるべく、祖国ドイツを後にパリを目指したのである。「ヨーロッパ文学史」の中で繰り上げられる批評の数々、例えば、スペイン物語詩ロマンセロのオリエンタルな色彩性、カルデロンとシェイクスピアの比較、カモンイスの叙事詩の美と憂い、北欧神話とギリシア神話の類似性等々は、

ヨーロッパというテキストを理解する確かな指針を随所で与えてくれる。

帰国

1804年4月、シュレーゲルはドロテーアとパリで正式に結婚式を挙げ、帰国の途につく。それにしても、彼のフランス紀行は何と多くの収穫をもたらしたことだろう。本稿ではほとんど触れなかったが、インドからイギリスに帰る途上パリに寄ったA・ハミルトンから彼はサンスクリット語を学び、以後も1804年11月から翌1805年3月までふたたびパリでこのインド古代語の研究に没頭して、1808年、ドイツ・ロマン派のインド学の金字塔『インド人の言語と知恵について』Über die Sprache und Weisheit der Inder を刊行したのだった⁽⁴⁸⁾。ドイツではゲオルク・フォルスターが四-五世紀インドの劇作家カーリダーサの『シャクンタラー』を、ウィリアム・ジョーンズの英訳(1789年)から独語訳した(1791年)⁽⁴⁹⁾頃から、言語学における印欧語の比較研究の進展と相まって、神秘に満ちた東洋のこの大国への関心が急速に高まった。フォルスターから『シャクンタラー』翻訳を献呈されたゲーテは、この作品に深く感動して、自作『ファウスト』Faust の「序曲」にその手法を採り入れている⁽⁵⁰⁾。またフリードリヒ・シュレーゲルに触発された兄アウグストもサンスクリット語の研究を開始し、後年(1824/25年)ボン大学でインド学を講じることになる⁽⁵¹⁾。

さて、1804年4月下旬、パリを出発したシュレーゲルに伴ったのは、「ヨーロッパ文学史」を受講したボワスレー兄弟だった。兄ヨーハン・ズルピッツ(1783-1854年)はケルン出身の美術学者兼収集家で、特に中世の建築に詳しく、ケルン大聖堂ドームの建設に尽力した他、弟メルヒオール(1786-1851年)と共に絵画の収集に精励したが、彼らの収集品はバイエルンのルート

ヴィヒ一世に買い上げられ、ミュンヘンのアルテ・ピナコテークの基礎を築いた⁽⁵²⁾。このボクスレー兄弟に案内されて、シュレーゲルはパリのルーヴル美術館やノートル・ダム寺院、ルーヴァン市庁舎のゴシック建築、デュッセルドルフのルーベンス・コレクション、ケルンおよびシュトラースブルクの大聖堂などを訪ねて、美術批評を発表した。『ヨーロッパ』誌に掲載された五篇（「パリ絵画通信」「ラファエロ論」「イタリア絵画補遺」「古い絵画の第二補遺」「古い絵画の第三補遺」）⁽⁵³⁾の他、『オランダ、ライン地方、スイスおよびフランスの一部を通る旅の書簡』（1806年刊）⁽⁵⁴⁾などがそれである。

ケルンに本拠をおいてフランスに何度か赴いた（1804-1808年）シュレーゲルは、その後、1808年、カトリックに改宗し、ウィーンに旅立つ。そしてメッテルニヒの命でドイツ連邦議会のために憲法草案を作成したりなどして、1829年、ドレスデンで没する。その間、ウィーンで盛大に行われた『古代および近代文学史』講義（1812年）のことはすでに触れた。

シュレーゲルがパリで開拓した様々な分野の学問、ロマンス語文献学、サンスクリット学、美術批評等は、すでに帰国以前にも帰国の道中からも次々と大輪の花を咲かせた。彼のフランス紀行はこのように実に内容豊かなものであった。

結語

十八世紀末にイェーナに花咲いたドイツの初期ロマン派が解体したあと、三十歳で敢行されたフリードリヒ・シュレーゲルのフランス紀行は、彼個人にとって人生の節目になったばかりではなかった。それは、以上見るよ

うに、その後のドイツ文学と文化の発展にも様々なかたちで新機軸をもたらしした。

ライン河を越えることで、シュレーゲルの視界は急激に広がり深まった。それを何より雄弁に証言しているのが、パリから彼が発信した文芸雑誌『ヨーロッパ』である。そこに発表された論文とエッセイは、彼の批評活動が、言葉の真の意味で、ヨーロッパ規模になったことを物語っている。この文芸誌の冒頭を飾る「フランス紀行」は、シュレーゲル自身の旅の記録である以上に、ドイツ文学が国境を越えて、国際的な次元のものに一步を踏み出したことを告げる宣言文の響きを持っている。

ライン河を越えて、あるいは海路フランスに旅して、収穫を持ち帰ったドイツの作家や批評家は少なくない。しかしフリードリヒ・シュレーゲルのフランス紀行が、ドイツとフランスを両軸に人々の眼をヨーロッパへ、あるいは遠く古代インドへと拓いたその意義はやはり出色である⁽⁵⁵⁾。

テキスト

- 1 Friedrich Schlegel, Kritische Schriften und Fragmente. Herausgegeben von Ernst Behler und Hans Eichner, Studienausgabe, 6 Bde., Ferdinand Schöningh, Paderborn / München / Wien / Zürich, 1988. [以下 FS, SF と略記]
- 2 Kritische Friedrich Schlegel Ausgabe. Herausgegeben von Ernst Behler unter Mitwirkung von Jean-Jacques Anstett und Hans Eichner, Verlag Ferdinand Schöningh, München · Paderborn · Wien. [以下 FS, KA と略記]
 - Bd. III, 1975: Aufsätze in Europa.
 - Bd. IV, 1959: Gemäldebeschreibungen in Europa.
 - Bd. VI, 1961: Geschichte der alten und neuen Literatur(Wien).
 - Bd. VII, 1966: Reise nach Frankreich.

- Bd.VIII, 1975: Über die Sprache und Weisheit der Inder.
 Bd. XI, 1958: Wissenschaft der europäischen Literatur (Paris).
- 3 Europa. Eine Zeitschrift, hrsg.v.Friedrich Schlegel, von Ernst Behler, Wissenschaftliche Buchgesellschaft, Darmstadt, 1973.
 - 4 Athenaeum. Eine Zeitschrift, hrsg.v.A.W.Schlegel und Friedrich Schlegel, von Ernst Behler, Wissenschaftliche Buchgesellschaft, Darmstadt, 1977.
 - 5 Novalis Werke. Herausgegeben von Gerhard Schulz, Verlag C.H.Beck, München, 1969. [以下 Novalis Werke と略記]

註

- (1) Ernst Robert Curtius, Friedrich Schlegel und Frankreich ; in >Kritische Essays zur europäischen Literatur<, Fischer Taschenbuch Verlag, Frankfurt a.M., 1984, S.78-94.邦訳, E・R・クルツィウス『ヨーロッパ文学評論集』, 川村二郎, 小竹澄栄, 他訳, みすず書房, 一九九一年, 所収。
- (2) FS, SF, Bd. 3, FS, KA, Bd.VII, 前掲テキスト3。
- (3) 註(1)参照。
- (4) FS, SF, Bd.2, 前掲テキスト4。
- (5) 1795から1797年にかけてシラーによって刊行された。ゲーテ, シラー, ヘルダー, フィヒテ, W・v・フンボルト, A・W・シュレーゲルなどが寄稿した。
- (6) FS, SF, Bd.1.
- (7) J・F・ライヒャルトによってベルリンで刊行された『芸術のリユツェウム』。
- (8) Ernst Behler, Friedrich Schlegel in Selbstzeugnissen und Bilddokumenten, Rowohlt Taschenbuch Verlag, Reinbek bei Hamburg, 1966, S.84. (邦訳, エルンスト・ベラー『F・シュレーゲル』, 安田一郎訳, 理想社, 1974年, 九〇頁)
- (9) Vorlesungen über schöne Literatur und Kunst.1801-1804年。
- (10) Novalis Werke.成立史については, 同書 S.799-804.
- (11) Novalis Werke, S.802.

- (12) Novalis Werke, S.499.
- (13) 断片七三, Novalis Werke, S.530.
- (14) 例えば, ヘルダーリンの詩「平和の祝い」Friedensfeier (1802/3年) はリュネヴィルの和議(1801年)を歌っている。Friedrich Hölderlin, Sämtliche Werke.Herausgegeben von Jochen Schmidt, Deutscher Klassiker Verlag, Frankfurt a.M., 1992, Bd.1, 338-343.
- (15) 『アテネーウム』断片二一六番, FS, SF, Bd.2, S.124.
- (16) 註(2)参照。
- (17) その記録は彼の『1769年のわが旅日記』に記されている。J.G.Herder, Journal meiner Reise im Jahr 1769. Herausgegeben von Katharina Mommsen, Philipp Reclam jun.Stuttgart, 1976.
- (18) G・フォルスターの『パリ素描』参照。Forsters Werke, in zwei Bänden, Aufbau Verlag, Berlin und Weimar, 2. Aufl., 1979, Bd.1, S. 215-267.
- (19) 亀山健吉『フンボルト』, 中公新書, 昭和53年, 第二章参照。
- (20) 註(1)参照。
- (21) FS, SF, Bd.6, S.164.
- (22) テクスト3参照。
- (23) 註(2)参照。以下の引用はFS, SF, Bd.3に拠る。
- (24) ゲーテ『イタリア紀行』, トレント, 9月11日朝の項。
- (25) Robert Minder, Paris in der französischen Literatur 1760-1960, in :Dichter in der Gesellschaft, Suhrkamp Verlag, Frankfurt a.M., 1972, S.332.
- (26) 前掲書, S.325f. 邦訳, 『十八世紀パリ生活誌』上・下, メルシエ著, 原宏編訳, 岩波文庫, 1989年/『パリの夜』, レチフ・ド・ラ・ブルトンヌ著, 植田裕次編訳, 岩波文庫, 1988年。
- (27) モンテスキュー『法の精神』, 第十四篇。『モンテスキュー』, 中央公論社「世界の名著」三四, 昭和58(55)年, 井上堯裕訳, 四六四-四七〇頁。
- (28) J.G.Herder, Ideen zur Philosophie der Geschichte der Menschheit, Zweiter Teil, Siebentes Buch.(Herder Werke in zehn Bänden, Bd. 6, Herausgegeben von Martin Bollacher, Deutscher Klassiker Verlag, Frankfurt a.M., 1989, S.251-285.
- (29) FS, SF, Bd.3, S.13f.

- (30) 前掲書, S.14.
- (31) 註(1), S.80.
- (32) FS, KA, Bd.III, S.17.
- (33) 註(1)参照。
- (34) 註32, S.35.
- (35) 『トゥルバドゥール』, アンリ・ダヴァンソン, 新倉俊一訳, 筑摩書房, 1983
(72)年 / 『愛と歌の中世』 トゥルバドゥールの世界, ジャンヌ・ブーラン /
イザベル・フェッサール, 小佐井伸二訳, 白水社, 1989年参照。
- (36) FS, SF, Bd.2, S.245-257.
- (37) FS, KA, Bd.XI, S.155.
- (38) 前掲書, S.157f.
- (39) FS, KA, Bd.XI.
- (40) E.Behler, Friedrich Schlegel, S.92. (邦訳, 九九頁)
- (41) FS, KA, Bd.VI.
- (42) E.Behler, Friedrich Schlegel, S.120. (邦訳, 一二八頁)
- (43) FS, KA, Bd.XI, S.3.
- (44) 前掲書, S.6f.
- (45) 前掲書, S.15.
- (46) J・J・ルソー『人間不平等起源論』, 本田喜代治 / 平岡昇訳, 岩波文庫,
昭和48(8)年, 五三頁。
- (47) FS, SF, Bd.2, S.114.
- (48) FS, KA, Bd.VIII.
- (49) Gero von Wilpert, Goethe-Lexikon, Alfred Kröner Verlag,
Stuttgart, 1998, S.547.
- (50) 前掲書, 同頁。
- (51) A・W・シュレーゲルは, 1820年から1830年にかけて, サンスクリット文
学の批判版テキストを編集した。
- (52) FS, SF, Bd.6, S.166-169.
- (53) テキスト3参照。
- (54) FS, SF, Bd.3, S.82-108.
- (55) 註(1), S.94.